

甲賀市信楽町神山水害履歴マップ

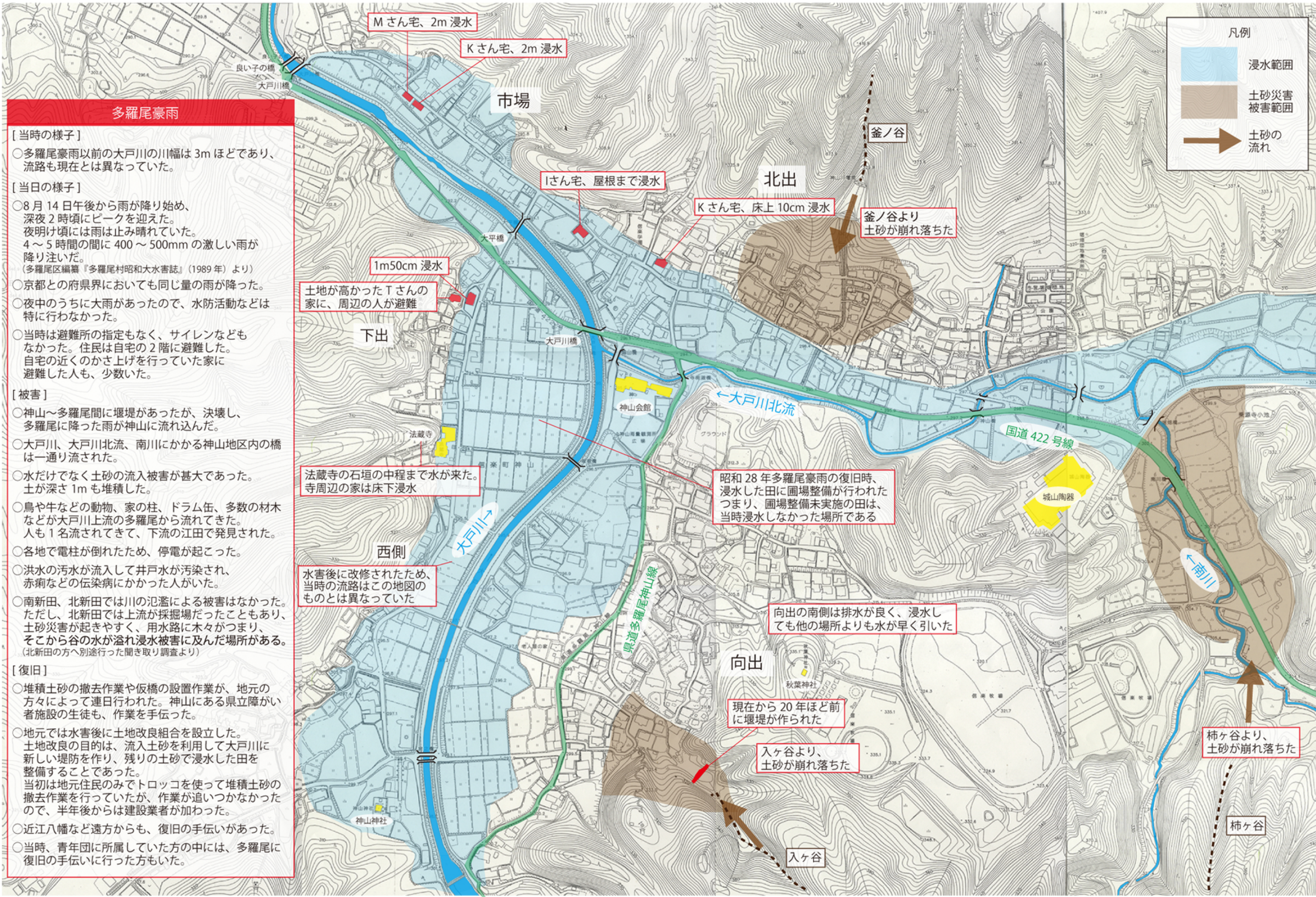
(平成 28 年 7 月 19 日 甲賀市信楽町神山会館で行った聞き取り調査に基づき作成)

その②

— 昭和28年8月14日～15日 多羅尾豪雨 —

作成 立命館大学 防災まちづくり研究室 (甲賀市都市計画基本地図上に作成)

0 100 200m



多羅尾豪雨

- [当時の様子]
 - 多羅尾豪雨以前の大戸川の川幅は3mほどであり、流路も現在とは異なっていた。
- [当日の様子]
 - 8月14日午後から雨が降り始め、深夜2時頃にピークを迎えた。夜明け頃には雨は止み晴れていた。4～5時間の間に400～500mmの激しい雨が降り注いだ。(多羅尾区編纂『多羅尾村昭和大水害誌』(1989年)より)
 - 京都との府県界においても同じ量の雨が降った。
 - 夜中のうちに大雨があったので、水防活動などは特に行わなかった。
 - 当時は避難所の指定もなく、サイレンなどもなかった。住民は自宅の2階に避難した。自宅の近くのかさ上げを行っていた家に避難した人も、少数いた。
- [被害]
 - 神山～多羅尾間に堰堤があったが、決壊し、多羅尾に降った雨が神山に流れ込んだ。
 - 大戸川、大戸川北流、南川にかかる神山地区内の橋は一通り流された。
 - 水だけでなく土砂の流入被害が甚大であった。土が深さ1mも堆積した。
 - 鳥や牛などの動物、家の柱、ドラム缶、多数の材木などが大戸川上流の多羅尾から流れてきた。人も1名流されてきて、下流の江田で発見された。
 - 各地で電柱が倒れたため、停電が起こった。
 - 洪水の汚水が流入して井戸水が汚染され、赤痢などの伝染病にかかった人がいた。
 - 南新田、北新田では川の氾濫による被害はなかった。ただし、北新田では上流が採掘場だったこともあり、土砂災害が起きやすく、用水路に木々がつまり、そこから谷の水が溢れ浸水被害に及んだ場所がある。(北新田の方へ別途行った聞き取り調査より)
- [復旧]
 - 堆積土砂の撤去作業や仮橋の設置作業が、地元の方々によって連日行われた。神山にある県立障がい者施設の生徒も、作業を手伝った。
 - 地元では水害後に土地改良組合を設立した。土地改良の目的は、流入土砂を利用して大戸川に新しい堤防を作り、残りの土砂で浸水した田を整備することであった。当初は地元住民のみでトラックを使って堆積土砂の撤去作業を行っていたが、作業が追いつかなかったため、半年後からは建設業者が加わった。
 - 近江八幡など遠方からも、復旧の手伝いがあった。
 - 当時、青年団に所属していた方の中には、多羅尾に復旧の手伝いに行った方もいた。

凡例

- 浸水範囲
- 土砂災害被害範囲
- 土砂の流れ

多羅尾豪雨

[当時の様子]

○多羅尾豪雨以前の大戸川の川幅は3mほどであり、流路も現在とは異なっていた。

[当日の様子]

○8月14日午後から雨が降り始め、深夜2時頃にピークを迎えた。夜明け頃には雨は止み晴れていた。4～5時間の間に400～500mmの激しい雨が降り注いだ。(多羅尾区編纂『多羅尾村昭和大水害誌』(1989年)より)

○京都との府県界においても同じ量の雨が降った。

○夜中のうちに大雨があったので、水防活動などは特に行わなかった。

○当時は避難所の指定もなく、サイレンなどもなかった。住民は自宅の2階に避難した。自宅の近くのかさ上げを行っていた家に避難した人も、少数いた。

[被害]

○神山～多羅尾間に堰堤があったが、決壊し、多羅尾に降った雨が神山に流れ込んだ。

○大戸川、大戸川北流、南川にかかる神山地区内の橋は一通り流された。

○水だけでなく土砂の流入被害が甚大であった。土が深さ1mも堆積した。

○鳥や牛などの動物、家の柱、ドラム缶、多数の材木などが大戸川上流の多羅尾から流れてきた。人も1名流されてきて、下流の江田で発見された。

○各地で電柱が倒れたため、停電が起こった。

○洪水の汚水が流入して井戸水が汚染され、赤痢などの伝染病にかかった人がいた。

○南新田、北新田では川の氾濫による被害はなかった。ただし、北新田では上流が採掘場だったこともあり、土砂災害が起きやすく、用水路に木々がつまり、そこから谷の水が溢れ浸水被害に及んだ場所がある。(北新田の方へ別途行った聞き取り調査より)

[復旧]

○堆積土砂の撤去作業や仮橋の設置作業が、地元の方々によって連日行われた。神山にある県立障がい者施設の生徒も、作業を手伝った。

○地元では水害後に土地改良組合を設立した。土地改良の目的は、流入土砂を利用して大戸川に新しい堤防を作り、残りの土砂で浸水した田を整備することであった。当初は地元住民のみでトラックを使って堆積土砂の撤去作業を行っていたが、作業が追いつかなかったため、半年後からは建設業者が加わった。

○近江八幡など遠方からも、復旧の手伝いがあった。

○当時、青年団に所属していた方の中には、多羅尾に復旧の手伝いに行った方もいた。

Mさん宅、2m 浸水

Kさん宅、2m 浸水

市場

釜ノ谷

北出

Iさん宅、屋根まで浸水

Kさん宅、床上10cm 浸水

釜ノ谷より土砂が崩れ落ちた

1m50cm 浸水

土地が高かったTさんの家に、周辺の人が避難

下出

大戸川北流

国道422号線

城山陶器

法蔵寺の石垣の中程まで水が来た。寺周辺の家は床下浸水

昭和28年多羅尾豪雨の復旧時、浸水した田に圃場整備が行われたつまり、圃場整備未実施の田は、当時浸水しなかった場所である

西側

大戸川

県道多羅尾神山線

向出

秋葉神社

現在から20年ほど前に堰堤が作られた

入ヶ谷より、土砂が崩れ落ちた

柿ヶ谷より、土砂が崩れ落ちた

柿ヶ谷

入ヶ谷

水害後に改修されたため、当時の流路はこの地図のものとは異なっていた

向出の南側は排水が良く、浸水しても他の場所よりも水が早く引いた